

落花吟三十首 次韻龍護叔 錄六

落花吟三十首 龍護叔に次韻す 六つを録す

す

其の一

【原文・書き下し文】

- 1 諸寺樓臺掛<sub>レ</sub>夕霏<sub>一</sub>  
諸寺の楼台 夕霏掛かり
- 2 疎鐘隱隱苑花飛  
疎鐘隱隱として苑花飛ぶ
- 3 綠煙抹去山添黛  
綠煙抹い去りて山 黛を添え
- 4 紅雨滴來苔染衣  
紅雨滴り来たりて苔 衣を染む
- 5 燕自多情應<sub>レ</sub>節至<sub>一</sub>  
燕 自ら多情にして節に應じて至り
- 6 雁元何意負<sub>レ</sub>春歸<sub>一</sub>  
雁 元何の意か 春に負きて帰る
- 7 可憐遊子無<sub>二</sub>消息<sub>一</sub>  
可憐むべし 遊子消息無く
- 8 南浦幾家人倚<sub>レ</sub>扉<sub>一</sub>  
南浦 幾れの家の人か 扉に倚るらん

【詩型・押韻】

七言律詩

『広韻』上平八微(霏・飛・衣・歸・扉)。『平水韻』上平五微。

【校勘】

異同無し。

【現代語訳】

落花のうた三十首 叔父の龍護の詩に次韻す 六首を採録

寺々の高楼には夕暮れの霏がかかり、まばらに聞こえてくる鐘の音もかすかで庭には花が舞い散っている。

緑の葉を覆っていた霏が消え去ると山々は黛の色に冴えわたり、赤い花から苔に雨の雫が滴り落ちて緑の衣に染め上げる。

燕はもともと情深いものでこの季節になればやってくるが、雁はいつたいどうして春を後に戻っていくのか。

哀れなことよ、旅にある人からの便りもなく、南浦では扉に寄りかかって帰りを待ち望んでいる人がいるであろう。

## 【解題】

この連作詩は、天保五年（甲午一八三四）、月性十八歳、豊前の蔵春園（梨花寮）での作。『清狂遺稿』はこの詩題に〈以下甲子の作〉と注するが、〈甲子〉は文久四年（一八六四）二月二十日以降は元治元年で安政五年（一八五八）逝去の月性が作ることは不可能。『清狂遺稿』冒頭の詩「秋晚香に懐いを寄す（寄懐秋晚香）」の題注には〈天保癸巳（一八三三）、師年十七歳、豊前の梨花寮に寓す（天保癸巳、師年十七歳、寓于豊前梨花寮）〉とあり、七番目の詩「平安」の題注には〈以下乙未（一八三五年中の作）とあるので、それらの間に置かれるこの連作詩は、甲午（一八三四）の作でなければならぬ〉。

この連作詩は、月性の叔父にあたる龍護（一七九四）が行く春を惜しんで詠んだ「落花吟」三十首の中の六首について、同じ韻字でしかも同じ順序で詠むという次韻の詩で仕立てられている。つまりこの詩についていえば、元歌である龍護の詩も霏・飛・衣・歸・扉という韻字を用いていることになる。この詩は、従来、龍護が月性の叔父であるということから個人的に作られたもののように見られているが、後に其の六の【補説】でも述べるように、蔵春園で学ぶ友人たちにも同じ題の次韻詩があることから、花の散りゆく晩春を題材に、しかも次韻詩というかなり難しい詩形で蔵春園のみなが習作として挑んだものであることがわかる。そもそも龍護が「落花吟」を三十首作ったのは、明の沈周（字は啓南、号は石田）が「落花詩」を全部で三十首を作って、それに文徴明・唐伯虎・徐昌国といった文人たちが和して応酬したというのが、我が国でもよく知られた風流事であり、龍護もそれを意識しての創作であろう。

## 【語釈】

**0 龍護** 月性の叔父で、名は覚応、字は子感、号が龍護、あるいは龍山。大阪の長光寺（天保市中央区島町二二一九）の住職。詳しくは海原徹『月性』（二〇〇五年、ミネルヴァ書房）第七八頁及び四四頁以降参照。

**1 樓臺** 高い建築物、高殿。唐、杜牧「江南春絶句」詩に、かつて文化的繁栄を誇った南朝時代の数多くの寺の楼台をまぼろしの如く見て、〈南朝四百八十寺、多少の楼台、煙雨の中（南朝四百八十寺、多少樓臺、煙雨中）〉と詠む。 **掛夕霏** 夕もやが掛かる。明、胡応麟「叢芳館（叢芳館）

〈豊嶺（折り重なる山々）高く盤りて夕霏掛かり、雲光霧色乱れて衣を侵す（豊嶺高盤掛夕霏、雲光霧色亂侵衣）〉。

**2 疎鐘** 間を置いて撞かれる鐘。「春曉殘夢（春曉殘夢）」詩（『清狂遺稿』上二九歳）に〈眠りに困しみ枕に倦みて（寝付かれず）紗窓（薄絹のカーテンの掛かった女性の部屋の窓辺）に倚れば、覚えぬ疎鐘の暁を報じて撞くを（困眠倦枕倚紗窓、不覺疎鐘報曉撞）〉。 **隱隱** 鐘の音が遠くからかすかに

響いてくるさま。中島棕隠（一七七九―一八五五）「己卯（一八一九）二月、弊社に小かに集りて春暁を

以て詩題と為す。余 偶ま三都〔江戸・難波・京都〕の旧遊を憶うこと有りて、因りて各の景趣〔三都での興趣〕を共にせしを撮りて、此の三絶〔三首の絶句詩〕を賦す〔己卯二月、弊社小集以春曉爲詩題。余偶有憶三都之舊遊、因各撮共景趣、賦此三絶〕〔『棕隱軒二集』卷之下〕詩の「角田川」に〔疎鐘隱隱として声初めて動き、徐ろに金龍山色の間〔浅草寺のあたり〕を渡る〔疎鐘隱隱聲初動、徐度金龍山色間〕〕。苑花 庭園に咲く花々。

**3 緑煙** 緑の葉にかかる靄。 **抹去** (靄が)ぬぐわれるように消え去る。 **山添黛** 墨のような山々の色が映える。

**4 紅雨** 紅い花に降る雨。唐、孟郊〔同年春宴〔科挙に合格した者の為に催される宴〕〔同年春宴〕詩に〕紅雨花上に滴り、緑煙 柳際に垂る〔立ち籠める〕〔紅雨花上滴、緑煙柳際垂〕。 **苔染衣** 苔を衣に見立てて、それが雫に濡れて鮮やかな緑色に染め上げられているかのようだという。北宋、梅堯臣〔劉原甫の復び雨ふりて永叔に寄するに和す〔和劉原甫復雨寄永叔〕〕詩に〔階下の青苔衣を染めんと欲し、晴光纔かに漏れ又た罪微たり〔小雨のけぶるさま〕〔階下青苔欲染衣、晴光纔漏又罪微〕〕。

**5 自多情** 情感が深い。(自)は、次の句の(元)と同じく、本来、そもそもという意。唐、裴說〔牡丹(牡丹)詩に〕遊蜂と蝴蝶、来たり往きて自ら多情なり〔遊蜂與蝴蝶、來往自多情〕。 **應節** その季節に合わせる。『礼記』「月令」に〔仲春の月〔旧曆二月〕……玄鳥〔燕〕至る〔仲春之月……玄鳥至〕〕とあるように、燕は春にやってくるかとされている。

**6 何意** いったいどういう訳なのか。 **負春** せつかくの春という良い季節を裏切るかのよう後ににする。梁川星巖〔二七八九一八五八〕「大槻瑞卿の仙台上に帰省するを送る〔送大槻瑞卿歸省仙臺〕」詩〔『星巖丁集』卷五に〕満城の鞦韆〔都会全体が人々で賑わっている〕春に負きて還る、東に指さすは金華 是れ故山なり〔満城鞦韆負春還、東指金華是故山〕。

**7 可憐** あわれに思われる。 **遊子** 故郷を離れて異郷にある者。元、胡助〔春草曲〕〔憐むべし遊子萍〔浮き草〕相似たり、春愁 草緑 千万里〔可憐遊子萍相似、春愁草緑千萬里〕〕。 **消息** 便り。唐、杜甫〔李白を夢む二首〔夢李白二首〕其の一に〕死別〔死に別れ〕已に声を呑むも、生別〔生き別れ〕 常に惻惻たり〔悲しむさま〕。江南 瘴癘〔伝染性の熱病〕の地にして、逐客〔反乱に加担したかどで追放された李白〕 消息無し〔死別已吞聲、生別常惻惻。江南瘴癘地、逐客無消息〕〕。

**8 南浦** 南の浦だが、『楚辞』「九歌」の「河伯」に〔子〔河伯を指す〕手を交えて〔手を取りあつて別れる〕〕東に行き、美人〔自分を指す〕を南浦に送る〔子交手兮東行、送美人兮南浦〕と詠まれたことから別れの象徴的場として用いられるようになり、梁の江淹〔別れの賦〕にも〔春草碧色、春水淥波〔清い波〕、君を南浦に送れば、傷ましきこと之を如何せん〔春草碧色、春水淥波、送君南浦、傷如之何〕〕などとある。 **幾家人** ここはどこかかの誰かがという不定詞用法。「幾家」は、「何処」

と同じでどこ。唐、劉長卿「崔昇の上都〔都の長安〕に帰るを送る〔送崔昇歸上都〕」詩に〔早春に鳴く鶯〕何れの処の客ぞ〔相手の崔昇をいう〕、古木幾れの家の人ぞ〔劉長卿自身をいう〕〔早鶯何處客、古木幾家人〕。

**倚扉** 門の扉に寄りかかって人の帰りを待つ。

宋、張方平「齊魯道中に睢陽を望みて念う有り〔齊魯道中望睢陽有念〕」詩には〔遙かに知る 梁国〔故郷の睢陽のある地方〕白雲の下、此の際〔この時〕吾が親 独り扉に倚るを〔遙知梁國白雲下、此際吾親獨倚扉〕と旅行く人を思つて扉に寄りかかっている。